# パリ聾学校との国際交流の取組　－22 年間の歩みを振り返って－

鎌田　ルリ子・伊藤　僚幸・眞田　進夫・石井　清一・深江　健司

筑波大学附属聴覚特別支援学校(以下、本校)とフランス国立パリ聾学校(以下、パリ聾学校)は、2003 年に姉妹校提携に関する協定書に調印し、2024 年までの 22 年間、視察・交流を重ねている。当初、手紙・メール・ビデオレターの往還で始まった活動が、教師間の視察及び指導法に関する情報交換へと進展し、現在は生徒相互訪問交流に発展している。本稿は、22 年間の歩みを振り返るとともに、グローバル時代における新たな国際交流の取組に関して検討した。

キー・ワード：国際交流　生徒相互訪問交流　オンライン交流　聴覚障害　グローバル人材

## 1　はじめに

本校とパリ聾学校との交流は 2003 年の姉妹校協定締結から始まる。当時の校長、齋藤佐和氏（現筑波大学名誉教授）とパリ聾学校高等部数学科の教師ジョエル・ルモルダン氏が旧知の仲であったことから、二人の固い友情と強い意志により両国の外務省、関係機関の理解を得て、聴覚障害者の教育機関における国際交流に風穴を開けた。

本交流は、2024 年で 22 年目を迎える。本稿は、この 22 年の歩みを振り返り、新たな国際交流の在り方もついて示唆を得ることを目的とする。

## 2　経過

Table 2に本校とパリ聾学校の交流年表を示した。

### (1)　姉妹校提携に関する協定の締結状況

2003 年９月 22 日、姉妹校提携に関する協定を締結した。その後、2008 年に一端途切れるが 2011 年に再締結し、2016 年３月 16 日に３回目、2021 年９月 30 日に４回目の協定更新を行った。

### (2)　生徒相互訪問交流

姉妹校提携から 10 年後の 2013 年、生徒相互交流が結実した。また、同年にはスカイプを利用したオンライン交流も可能となり、両校の心理的距離は一気に縮まった。以後、2024 年までの 12 年間に本校生徒はパリ聾学校を４回訪れ、パリ聾学校の生徒は日本を４回訪れた。

### (3)　渡航人数

22 年間に渡航した人数を Table 1 に示した。両校で 63 人の生徒、49 人（延べ人数）の教職員が渡航した。

Table 1　22 年間の渡航人数（人）

| | 本校 | パリ | 合計 |
|---|---|---|---|
| 生徒 | 39 | 24 | 63 |
| 延べ教職員数 | 32 | 17 | 49 |
| 合計 | 71 | 41 | 112 |

### (4)　交流活動の特徴

実施形態、内容により時期をⅣ期に分け(Table 2)、各時期の交流活動の特徴を以下のとおり整理した。

#### 第Ⅰ期（2003 年～2008 年）

姉妹校提携に関する協定提携後活動は、主に手紙やメールのやりとりが中心だった。

Fig. 1　2003 年姉妹校提携の調印式（齋藤,2023）

2008 年に５年間の協定期間は終了したが、その後も途切れることなくやりとりは続いた。更に発展させたいという両校の強い思いから 2011 年３月に姉妹校提携に関する協定を再締結することになった。

Table 2　本校とパリ聾学校の交流年表

| 期 | 日 | 出来事 | 渡航 | 渡航者 |
|---|---|---|---|---|
| Ⅰ期 | 2003 年 ９月 | 姉妹校提携に関する協定の締結<br>（2003 年９月 22 日～2008 年９月 21 日） | 訪仏 | 本校校長 |
| | 2004 年 12 月 | 視察及び指導法に関する情報交換 | 来日 | パリ聾学校教員５名 |
| Ⅱ期 | 2011 年 ３月 | 姉妹校提携に関する協定の再締結<br>（2011 年３月 22 日～2016 年３月 21 日）<br>往復書簡、メール、ビデオレター | なし | ― |
| | 11 月 | 視察及び指導法に関する情報交換 | 訪仏 | 本校教員３名 |
| | 2012 年 ７月 | 生徒相互訪問交流の実現に向けた協議 | 来日 | パリ聾学校教員３名 |
| | 2013 年 １月 | 生徒相互訪問交流の実現に向けた協議、準備 | 訪仏 | 本校教員５名 |
| Ⅲ期 | 2013 年 12 月 | 生徒相互訪問交流①　オンライン交流 | 訪仏 | 本校高等部生徒 10 名・教員４名 |
| | 2014 年 ４月 | 生徒相互訪問交流②　オンライン交流 | 来日 | パリ聾学校生徒５名、教員２名 |
| | 2015 年 12 月 | テロの影響により訪仏交流中止<br>オンライン交流 | なし | ― |
| | 2016 年 ３月 | 姉妹校提携に関する協定の更新<br>（2016 年３月 16 日～2021 年３月 15 日）<br>生徒相互交訪問流③　オンライン交流 | 来日 | パリ・ロダン聾学校生徒９名、<br>校長・教員３名 |
| | 2016 年 12 月 | 教員相互訪問交流教育推進 | 訪仏 | 本校教員４名 |
| | 2017 年 12 月 | 生徒相互訪問交流④　オンライン交流 | 訪仏 | 本校高等部生徒 10 名・教員５名 |
| | 2018 年 ３月 | 生徒相互訪問交流⑤　オンライン交流 | 来日 | パリ聾学校生徒５名・教員２名 |
| | 2019 年 12 月 | 生徒相互訪問交流⑥　オンライン交流 | 訪仏 | 本校高等部生徒９名、教員５名 |
| コロナ禍 | 2020 年<br>～2022 年 | オンライン交流 | なし | ― |
| | 2021 年 ９月 | 姉妹校提携に関する協定の更新<br>（2021 年９月 30 日～2026 年９月 29 日）<br>メール | なし | ― |
| Ⅳ期 | 2023 年 ５月 | 生徒相互訪問交流再開⑦　オンライン交流 | 来日 | パリ聾学校生徒５名、教員２名 |
| | 2024 年 12 月 | 生徒相互訪問交流⑧　オンライン交流 | 訪仏 | 本校高等部生徒 10 名、教員５名 |

**第Ⅱ期（2011 年～2013 年）－生徒相互訪問交流の実現に向けた取組－**

2012 年７月、パリ聾学校から３名の教員が来日し、生徒同士が直接コミュニケーションできる国際交流の実現に向けて話し合いを行った。活動内容、予算、滞在先、通訳方法など現実的課題を解決すべく２年間協議を重ねた。

**第Ⅲ期（2013 年～2019 年）－生徒相互訪問交流－**

2013 年 12 月、ついに本校生徒 10 名、教員４名がパリの地を踏み、念願であった生徒相互訪問交流を実現させた。2019 年までの７年間に本校生徒の訪仏３回、パリ聾学校生徒の来日４回、計７回を数えた。また、情報機器が進化しリアルタイムでのオンライン交流が可能となった。渡航前後にオンライン交流を組み合わせることで内容の充実だけでなく生徒自身の期待感・親密性の向上に役立った。

2019 年の交流では、自国文化の紹介、スポーツ・昼食交流、授業参加、ディスカッション「ストライキについて」の他、ルーブル美術館見学やクリスマスマーケット散策などこれまで以上に充実した活動を展開することができた。

**コロナ禍（2020 年～2022 年）**

2020 年、COVID-19 の大流行により全世界でオンライン化が加速し、情報通信機器・技術が進化した。本交流も訪仏交流を中止し、オンライン交流のみを実施した。

**第Ⅳ期（2023 年～2024 年）**

COVID-19 が５類に移行して間もない 2023 年５月パリ聾学校生徒５名、教員２名が来日して待望の対面交流を再開させた。交流では、空手・剣玉などの日本文化に触れたりゆるキャラの共作に取り組んだりした。本校の生徒たちは、日本のアニメに感動するパリ聾学校生徒の様子を目の当たりにするなど、日本文化の素晴らしさに気付く機会となった。

足踏み状態にあったパリ聾訪問は 2024 年 12 月、５年ぶりに叶った。20 年以上が経過したことを祝した式典が企画され、これまで構築した絆を更に深めた。

## ４　交流の意義及び期待される効果

グローバル人材育成推進会議中間報告（2011）によると、グローバル人材とは、「日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」とされる。そして、このグローバル人材に求められるスキルには以下が挙げられている。

Ⅰ. 語学力・コミュニケーション能力
II. 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感
Ⅲ. 異文化理解に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

このことを踏まえ、本校生徒にとっての国際交流の意義を考察する。

### (1)　グローバル時代の一員としての一歩を踏み出す

インターネット普及により、現代は瞬時に世界とつながりリアルタイムで情報発信や情報入手が可能なグローバル時代となった。本校の生徒たちもインターネットを活用し海外のスポーツ番組やアーティスト情報を見たり書籍や雑誌を調べたりするなど、海外とつながる暮らしが日常化している。このように手軽に海外とつながる時代を生き、世界との心理的距離は縮まっているものの本校では留学などの渡航経験が少ない。

渡航経験は、海外の文化や歴史に直接触れる貴重な学びになるだけではなく、生まれ育った国の歴史、文化への気付き、そして再発見、再評価の機会になる。また、多様性への気付き、価値観への転換など人生の転機が生まれることもある。

このように渡航経験から得られる多種多様な刺激は、積極的に人生に向き合う機会であり、本校の生徒にとってもグローバル時代の一員として一歩を踏み出すチャンスになるであろう。

### (2)　多言語、異文化コミュニケーション

グローバルな時代を生き抜くためには、異なる文

化や価値観をもつ者が互いを尊重し、良好なコミュニケーションをとる力が求められる。

聴覚障害がある本校生徒は、聴覚的フィードバックの困難さから音声によるコミュニケーションに消極的になりやすい。「伝わらない」、「話されていることが分からない」などコミュニケーションの難しさに直面することが多く、慎重になってしまうのかもしれない。

生徒相互訪問交流では、日本語・フランス語・英語、日本手話・フランス手話など多様な言語が飛び交う大変魅力的な状況が生まれる。一般的に考えると、日本語の手話を日本語に、その日本語をフランス語に、更にそのフランス語をフランス手話にという３段階の通訳が求められ、少なくとも３人の通訳者が必要となる。ところが、実際の生徒同士のやりとりでは通訳者を介しないことが多い。音声言語（日本語・フランス語・英語）、手指サイン（日本手話・フランス手話）、文字（英語、日本語、フランス語）、視覚情報（絵やイラスト）、非言語情報（視線、表情や口の動き）など、生徒たちは手持ちのコミュニケーション手段を用いて自分の気持ちや思いを伝えたり、分かろうとして必死で聞いたりする。だからこそ通じ合えた時の喜びはひとしおである。

グローバルな時代においては、聴覚障害は一つの個性、一つの強みとなる。生徒たちは音声コミュニケーションを超えるグローバルコミュニケーションを体験することで、聴覚障害という自分の個性や強みに向き合うことにつながるであろう。

### (3) 生徒たちの思い

附属学校国際教育推進委員会報告書（2023）における交流後の生徒の感想によると、「直接交流した方がスムーズにコミュニケーションでき、アイコンタクトを取りながら伝えやすい」、「誰が話しているのか周囲の状況を正確に把握できる」、「対面だと表情なども見やすくコミュニケーションの幅が広がる。一方オンラインだと落ち着いた交流ができ、どちらも固有のいい点がある」、「会えないからこそコミュニケーションを取る楽しさを感じられる。対面だと直接顔を見て間近で交流ができる良さがある」、「オンラインは対面よりも多い人数で交流をすることができる。対面では直接手話を立体的に見ることができて交流しているという実感が深い」などが挙げられている。

## ５．おわりに

本校が生徒相互訪問交流を実現させた 2011 年は、文部科学省によるグローバル人材育成推進会議中間報告（2011）が発出された時期であり、まさしく本交流は、時代の潮流に応じた取組である。

2013 年から 2019 年の７年間、相互に渡航し合い順調に交流を深めたが、COVID-19 の大流行で国際交流は新時代を迎えた。これまで障壁となっていた時間、距離、経費の困難が一気に解決された。しかし、海外渡航経験によって得られる大きな刺激は、普段の生活では得られない貴重な経験ができる。

手話、表情など視覚的情報が欠かせない本校生徒にとって対面交流は、情報の確かさ、安心感を得ながらコミュニケーションをとることができる良さがある。一方、オンライン交流は、計画立案・安全面・資金面での手軽さがあり実行可能性が高く、多くの生徒が参加できるというメリットがある。今後は、コロナ禍で進化した音声文字変換や翻訳ソフトなど情報機器を更に活用し新たな交流スタイルの実現を目指したい。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

附属学校国際教育推進委員会報告書 第２～16 集（2011～2018、2020～2024）

原島恒夫　橋本時浩　松本愛　伊藤詩織（2017）聴覚障害, 72, 38-43.

文部科学省　グローバル人材育成推進会議中間報告（2011）

齋藤佐和（2023）聴覚障害, 78, 62-63

筑波大学聴覚特別支援学校紀要第 39, 42（2017, 2020）